

(著者注：南アへの出張は1998年のことなので、今とは事情が大きく異なっている。)

南アフリカ素描（3） ― ソウェトのブリキ小屋 ―

― ソウェト・ツアー ―

3日間の会議の終わった日、わたしはヨハネスブルグの南西30キロメートルのところにあるソウェト(Soweto)に出かけた。ここはアパルトヘイト時代、黒人居住区として作られた人口100万人の都市である。大学、病院、教会それに3000軒もの店がある。住民はズールー族、コーサ族、北ソト族など南アフリカの9部族である。

白人のガイドはソウェトには行かない。ガイドのフレアリーはどこにでも連れていってくれたが、ソウェトだけはご法度。旅行者がここを訪れるには、ジミーのバス・ツアーを頼むしかない。ジミーはソウェトで生まれ育った黒人で30代半ばぐらい。黒人の間では名士であり、「金持ち」に属するらしい。

ツアーの一行はまず市場を訪れた。市場はスラム化はしていないもののやはり極端に貧しい。ゴミ屑が溢れ、土ぼこりが立っている。店は1坪ほどの小さなスペースが多く雑貨品、野菜、食料品を売る。

段ボールを積み上げた台の上でリンゴ、オレンジ、洋ナシを売る中年の女性、地べたに座り込んで安手のシャツやスカーフや雑貨を売る老人……。たまり場では数人の黒人が昼間からビールを飲んでいる。無職なのだろうか。サントン・サンの清潔で豊かなショッピング・モールと比べると、余りの違いに慄然とする思いである。

ツアーの一行20人は先導のジミーについて足早に市場内を見学する。黒人たちはとりたててわれわれに注目するわけではないが、ほとんどが白人の観光団は目立つ。ツアーに参加した夫人たちは、道端で売っている安物の香水やブローチには興味もない。結局われわれは10分ほど市場を見学しただけでそくさと立ち去った。

その後ツアーは住宅地へ向かった。住宅地といってもブリキ小屋が密集する地域で、小屋はほんの数坪しかない。小屋には電気も水道もトイレもない。ソウェトに火力発電所があるが、電力は白人居住区に供給され、黒人たちは石灰クズを集めて煮炊きをしている。

人々は水を求めて日々何キロも往復する。トイレも数十人に1人の共同トイレがあるだけ。

ジミーは1軒のブリキ小屋に一行を案内した。内部は整頓されているが、家

財道具らしきものがない。食事をするための鍋とボウル、数個のダンボール箱、それにふきんが2つ、3つ。生きていくための最低限の道具しかない。

だが付近で遊んでいた子どもたちは、意外に人なつこかった。一行に笑顔を向け付近を案内してくれた。何よりも印象的だったのは、子どもたちがお金をねだらないことだった。貧しい国を訪れると、子どもたちが旅行者にまわりつき、金や物をねだることが多い。もちろんソウエトの一側面にすぎないだろうが、わたしが見た範囲ではではそのようなことはなかったし、子供たちの表情が明るいのが印象的だった。

ツアーの終わり近く、われわれは黒人の金持ち階級の立ち並ぶ家を通り過ぎた。この一角はマンデラ元夫人が住む豪邸がある。われわれの目にはそれほど豪華とはいえないが、それでも100坪以上はある邸宅が続く。小ざれいな庭の池には噴水が湧きあがる。ここでも貧富の差は厳然としている。

— 憎悪と流血の歴史 —

17世紀、オランダ系ブーア人は南アフリカに移住して植民地を開いた。キリスト教カルビン派に属していたブーア人は、「人は神に救われる者と救われない者との分けられ、ブーア人こそ神に救われるものである。」と信じていた。ここから「黒人は白人に仕えるためにこの世に生まれてきた」という恐るべき差別意識が生まれる。

選民思想を奉ずる国民党は、長い間南アフリカを支配してきた。

白人は広い庭にプール付きの豪華な家に住み、黒人のメイドを使い、高級輸入車を乗り回す豊かな生活を送っていた。一方で黒人は居住区に閉じこめられ、教育の機会も奪われた。多くの黒人たちは、無意識のうちに劣等意識を刷り込まれただろう。富める白人には心地よい暮らしだろうが、極貧の黒人にとっては生きること、いや、生まれてきたことさえ怨嗟の種であっただろう。

白人が黒人を搾取する体制が続いた。夕方6時以降の外出は禁止され、居住するには「居住許可証」が、働くには「労働許可証」が必要だった。穏健派の黒人活動家さえ常時秘密警察の監視下にあった。数多くの黒人活動家が秘密警察によって虐殺された。いくら努力をしても一生黒人居住区から抜け出られず、ここで死ぬほかはなかった。このいきさつは映画「遠い夜明け」（原題 Cry Freedom）に詳しい。

1976年ソウェトで黒人の武装蜂起が起こり、200人近くが死んだ。その後国民党は反黒人政策を強化。これに反発して黒人のゲリラ組織が生まれ、暴動は激化し、黒人と白人の対立は深まる一方だった。

1990年、頻発する暴動、経済制裁、高まる国際非難に抗しきれず、デ・クラーク大統領はアパルトヘイト撤廃を発表。27年間収監されていた活動家ネルソン・マンデラを釈放し、肌の色を越えた国民の統合への道を探った。

4年後、黒人のマンデラが大統領に、白人のデ・クラークが副大統領となり、国民統合政府が実現する。こうして南アフリカは人種間の「真実の和解」に向けて第一歩を歩み始めた。

— 負の遺産に苦しむレインボー・カントリー —

南アフリカは美しい国である。インド洋と太平洋に面する長い海岸線、3000メートル級の山々、高原と森林、サバンナ、多くの野生動物、美しい大輪の花……。ここは自然と資源に恵まれている。

この国には石油以外のほとんど全ての資源がある。金、ダイヤモンド、プラチナ、チタン、パナジウム、クロム、白金、希少金属などの鉱山資源に恵まれている。広大な土地、鉱山資源、畜産物、農産物など、大国となるため必要なほとんどがある。

ホテルのサウナに入った後に、今わたしはサントン・スクウェアのインペリアル・パレス（帝苑）で、冷えたハイネケンを飲み、ローストダックを食べながらこの国の印象をメモしている。五つ星ホテルに泊まり、会議に参加し、ショッピング・モールで買い物をし、サバンナで野生動物を見物し、夜は野生動物料理店で舌鼓をうつ。点と線だけの旅をすれば南アフリカの快適な一面しか見えない。そこに住む人々の生活は霞んでしまう。

「真実の和解」から2年を経たが、この国は本質的問題を抱えて呻吟している。人種間の対立、貧富の差、教育の格差、失業率・犯罪率の高さである。この国には、自分の努力ではどうにもならない絶対的貧困がある。

わたしは日本に生まれ、教育を受け、高度成長期に職を得た。ここには極貧に生まれ、差別を受け、教育を受ける機会もなく、文字も読めず、職もない多くの人々がいる。生存をかけて日々争っている人々に、生半可な人生論など足しにもならない。

新生の南アフリカ国旗は、マンデラが理想とした「虹の国」（レインボー・

カントリー)を表す6色の虹からなっている。赤は解放運動で流された血、緑は農業と森林資源、青は空と水、黄は鉱物資源、黒は黒人、白は白人を表す。



十分な資源を持ちながら負の遺産のため呻吟するレインボー・カントリー。それがわたしの垣間見た南アフリカである。この国の夜はわずかに白みはじめたが、陽が昇るのはまだまだ先のようなのである。